

大陸（満州）

戦車兵志願 満州での教育

鳥取県 村口 信義

「長男なのに何で戦車を志願したのだ」とよく聞かれると、「体が小さいのに肥えていて、歩くと股擦れがすると思ったからだ」と答えていました。

私は大正十一年五月十五日、鳥取県西伯町の農家で生まれました。長男で、姉一人、弟二人という家族でした。検査では志願者四人全員合格、そのうちの一人で、昭和十七年一月十日現役兵として加古川の戦車第六連隊補充隊要員として入営しました。

第二中隊（斉藤隊）で三カ月の初年兵教育を受け、

一期の検閲後、命令が下り、戦車第六連隊補充要員なのでシンガポールへは将校・下士官が出ていった。しかし、自分たちは新品の夏服を全員もらったのですが待機させられました。

その後一カ月、満州吉林省公主嶺に行くことになり、転属命令により屯営を出発。五月二十六日、下関発、連絡船で釜山着。列車（客車）で鮮満国境通過は五月二十八日、臭い列車だったことをよく覚えています。

五月二十九日、公主嶺の第四中隊（中隊長渡辺中尉）に編入され勤務をしているうち、七月八日、自分は志願していたので下士官候補を命ぜられ、教育を受けました。二十五日、操縦中、足を捻挫して公主嶺陸軍病院入院、九月十七日治療退院しました。

内地へ帰り兵庫県の青野ヶ原で教育、一般基礎教育

と戦車教育がされる。そのときの班長は少年戦車兵の一期生でした。昭和十七年十二月三日、四平陸軍戦車学校に分遣を命ぜられました。司令部、第六連隊、第七連隊は勃利にありました。

昭和十七年十二月六日、勃利出発、寧安県境を通過し、八日四平着、十日入校、第四中隊で教育を受け、兵長になったのは、昭和十八年六月一日。

戦車学校の教育は、教官と助教(軍曹)がいて助手はいませんでした。基礎的教育は体操を多くやらされました。小銃の射撃とか銃剣術は全々やりません。戦車の機械と操縦が主です。私は、一般のことは青年学校でほとんど覚えていたので苦労はなかったのですが、ただ戦車の機械が分からなかっただけです。

自分は初めてだったが、他の人は自動車の運転ができる人ばかり、クラッチ(変速器)などといわれても何だか分からない。ギヤーも入らぬ。ところが少年戦車兵は一パツで入れられる。腕時計は腕にしていると狂ってしまうので、作業衣の上のボタンの所にとめてある。何から何まで未知のことばかり。

少年戦車兵出身者は教官よりうまい。私たちは内田六郎助教に初めから教わりました。本当は高田班長に教わるはずですが、班長は一般兵科の人で、戦車技術は助教が担当です。教官は陸軍士官学校出の若い将校なので、教官より助教の下士官の方が先生でした。

中戦車は五人乗り、操縦、銃砲、無線とある。戦車長と一番砲手、二番砲手とあり、高さは操縦兵の肩で足で知らせ、方向は転把で、引鉄は綱を引っ張る。

眼鏡を見ながら車長は砲塔と共に動く、足は操縦兵の肩の所。窓はあっても開けると、キャタピラの両方から塵、土砂が入るので開けられない。三方に横の穴があるが、マッチ棒ぐらいの細さ、敵の銃弾が入らぬようになってる。

中の者は全部拳銃を持っていて、小さな穴から拳銃を撃つ。穴は中から開けられるが、外からは開かない。だから、戦車が水の中に落ちたら出られない。満州で冬季演習で落ちたとき、外から叩いても開かぬので、底板のボルトをはずし、中の兵隊は助かったことがあります。

満州での冬季演習は寒さとの戦いというか、凍傷で

片足切断される者もいる。凍傷にかかったとき、検査はその人々の体質により違う。一番初めは手を氷に入れてすぐ上げる。指がローソクのように白くなる。班長はそれを見て、体質により、直ぐ上げる者、三分ぐらい大丈夫な者、五分もできる者と限界を見る。上げたら、次に古い古参兵が毛布でこすって戻す。痛みを感じてきたらもう大丈夫。痛みを感じなければ切断しなればならない。ペーチカに手をかざしたら手は腐ってしまう。

満州では防寒手袋をしていても、指を曲げたらもう伸ばせなくなってしまう。顔など冬季演習で凍傷にかかると皮一枚がむけるだけ、凍傷になりそうになつたら、銃を脇に置いても手を擦る。上官もこれは許しています。人間ばかりでなく、馬も凍傷にかかるのです。話をまた戦車のことに戻します。戦車は冬季の夜がつらい。夕飯はほとんど冷飯で一人で食べる。エンジンかけ、一時止め、余熱運転をする。そうしないとエンジンがかからなくなってしまう、鉄の箱の中だから

体も凍ってしまふ。

反対に夏はエンジンが焼け、外から照らされ、車内には風が入らない。そんなときは、一般の歩兵は楽だと思ひました。戦車兵は寒さにも、暑さにも耐えられなければならぬ。そのため、朝晩欠かすことなく乾布摩擦をし、皮膚を鍛錬していました。

戦車学校を卒業したのは、昭和十八年十一月二十五日でした。二十七日、原隊の勃利に帰りました。その時初年兵が入つて来たのです。我々もやっと三年兵になったのですが、昭和十九年二月四日、戦車第二師団の通信教育隊に分遣を命ぜられ、五月二十一日、教育を終了しました。

やっと原隊復帰と思つていましたら、六月二日、鉄道第二連隊に転属を命じられ、二十日から哈爾濱で、現地入営した幹部候補生の助教を命じられ、教育に専念していたのですが、二カ月後の、八月十九日哈爾濱を出発、二十日満州里で国境の警備です。

千二百メートル先にはロシア軍の兵舎がある。ここは日ソの国境が交錯していて、お互いに自国の領土だ

として、お互いに越境だと言ったり、思ったりしている緊迫した所でした。満州里の兵舎から見ると信号弾が上がる。日本人のスパイが上げるらしい。今思いますが、終戦一カ年前のソ満国境でしたから、ソ連軍は日本軍の移動を調べていたのです。もともと、精銳といわれた満州の関東軍は、櫛の歯を引くように、南方へ、台湾、朝鮮、あるいは本土防衛のため内地へも移動していたのですから。

私たちも、本土防衛のため、命令により昭和二十年五月六日満州里を出発南下、鮮満国境、朝鮮半島、連絡船で玄界灘を渡り、博多港に着いたのは五月二十七日でしたが、空襲のため沖で停泊、解除になってやつと上陸。二十八日、転属部隊の鉄道第二十連隊へ入隊申告しましたが、ここでもまた空襲、壕に飛び込んで事なきを得ました。

しかし、内地の兵隊は水筒の代わりに竹筒を腰に下げている。口には出さなかったがこれでは日本は負けると思いました。五月三十一日から、鉄道の防空作業に従事しました。空襲もだんだんとひどくなり、都市

もだんだん焼野原となる。軍事施設や港湾は爆撃を受ける。我々の任務の鉄道施設も被害が出てきて、輸送状況もますます悪くなりました。

終戦となり、連隊副官が東京へ行き、召集解除は八月二十九日でした。男は金抜ききとなるというので十名ほどが逃亡しましたが全部捕まりました。思えば嘘のような、笑い話ですが、そのとき兵隊は本当に深刻な気持ちでした。

内地では終戦のため自動車の車輪が盗まれたり、放置された軍馬が兵隊を見て啼いていたのを見て、哀れだなあと感じたことを記憶から消すことはできません。

しかし、私は内地勤務で本土に帰ったが、私たちの部隊の戦友や、戦車学校、通信学校の戦友で、ソ連との戦闘で戦死した人も多く、また、終戦後ソ連に抑留され、長期間強制労働で死没した人も多く、苦しい強制労働に耐え抜かねばならなかったことを思うと、無事に帰還し得たことを幸福だと思っております。